

矢 文

「大変だ……大変だぞ」

声をかぎりに、ど鳴りながら山路を駈けておりてきた人がある。

今迄、話に夢中であつた蓮長と浄念は、思わず路の小岩から立上つた。

「何事だ、騒々しい」

浄念もど鳴り返えした。

「これだ……」と言いながら、下人は一本の矢を浄念の眼の前につき出した。

みれば、矢には文らしいものが結びつけてある。浄念が、あわてて、結び文を手にとつてみると、なる程容易ならざる文面が書かれてある。

「浄念殿、何事ですか」

蓮長が落着いた口調で傍から訊ねた。

「山下園城寺よりの果し状です。近々叡山の寺塔を焼き払って仏恩を報ぜんとす。しかれば仏の

大慈悲を持つてあらかじめ事前に之を通告するという、人を馬鹿にした矢文です」

「して、これを何処で手に入れたのか」

蓮長は下人に尋ねた。

「それがさあ、処もあるうに、根本中堂の入り口の柱に突きささっておりますので」

「ええっ！」浄念の顔色が思わず変った。待つていましたとばかりに、下人は言葉が続けた。

「それだけではありませんぞ、大講堂の柱にも矢文がありました。この堂近く炎上すべしと、それを持った者は、東塔をふれ廻っております。あれ、あの声をききなさい」

そう言われて、耳をすませば、なにやら騒がしい声が、谷を渡つて聞えてくる。おそらく、その矢文を持つて、東塔をふれ歩いておる喧騒であるらしい。

「どれ浄念殿、その矢文をみせなさい」

蓮長は浄念から矢文を受けとると、じいっと一覽したが、

「さあつ、早く行け」と下人に命令をした。矢だけをもつた下人は、もどかしそうに、

「その文を下せえ」と手を出した。

「これは、お前にやる訳にはゆかぬ」

「でも、その証拠がなければ、ふれ廻つても、なんにもなりません。早く返して下せえ、急ぎますだ」

「何んと言つても、これはやれぬぞ」

「ええっ！」下人の顔は急に青くなつた。

「あんたは何んと言う名前の坊さんだ、名を言え、生意気なあつ」

「蓮長という者ぢやが。」

……わあつと言う、路の木立を揺がすような声が起つて、二、三十人の山法師が長刀を手にして、地響き立てながら駈け下りて来た。たそがれ時の山道にきらめく、長刀の光芒は、身をひきしめられるような殺気がみなぎっている。

「こりや、下人、何を愚図々々しておる。いそげ、いそげ」

と先頭に立つた山法師の一人が、大声にどなりつけた。

「でも……」

下人は蓮長の手にした文を、恨めしげに眺めていた。

「蓮長つ、何故の邪魔だてだ。仔細によつては容赦はせぬぞ、あの声が聞こえぬか、東塔はすでに合戦の用意が出来上つたとみえる」

先程迄は人の喧騒のみであつたが、今はお手のものの、鐘や太鼓を打ち鳴らして、合図をしておるとみえ、東塔の峰は、耳を聳せんばかりの騒がしさである。それにひきかえて、蓮長が下人の行手をふさいだので、西塔の峰々は静かに襲いせまる夜気に包まれて、もの音一つしないので

あつた。

「われ等は何にを措いても、いの一に、米蔵を守護する僧達だ。言わば一山の精鋭、道をふさぐと為にならぬぞ、汝等学僧も、早々に舞い戻つて、仏像の守護にでもあたれ。今宵、園城寺よりわが山に夜討ちをかけるとの矢文があつたのだ」

「先ず先ず落着かれよ」

蓮長の口調には少し皮肉な調子があつた。

「山法師達は、口を開けば園城寺の合戦のと、毎度言われるが、してこの合戦は誰がひき起すのか」

「言わずと知れた、園城寺の奴ばらだ」

気負い立つた山法師が異口同音に叫びたてた。

「そうとも限らぬぞ」

と蓮長はきつぱり言つた。

「なんだと」

「たわけっ」

「気ばし狂つたか」

怒り狂つた山法師が、蓮長に投げつけた言葉である。

「名物の山法師も、事がなければ、その威かめしい格好で、叡山をわが物顔に、押し歩く訳にもゆくまい、そこで態々、人騒がせをする愚人もたまには出てこよう、平穩無事が続けば、貴僧達が無惚、口舌の徒の学僧達に頭が上らぬ、そこでたくらむんじや、わからぬか、この道理が……今でもこれをほうっておけば、一山をあげての合戦の準備、準備が出来れば、勢の赴く所手をこまぬいて討たれるのをいさぎよしとせず、軍勢を山下にくり出して、今宵にも園城寺へ、当山より夜討ちをかけるであろうが、蓮長この叡山にある限りはその愚拳は敢えてさせぬぞ……まあまあ暫く聴かれい。貴僧達は経巻を手に持つひまもなく刀剣を握ぎるのを誇つて、われこそ叡山を守る者だと自負しておられるが果してそうか。請う一考せられよ。山を降りて、京の街の人々をみたまえ。天台法華宗の話に耳を傾けるものは一人もなく、今や、念仏や禅宗が、人の心を奪つておるではないか、その時にあたつて、仏飯をはみながら、法衣を着しながら、わが法義を研鑽するでもなくいたずらにわが山を尊しとし、伽藍の壮大を誇り、これを護持するのに刀杖弓箭をこととするのは如何なものであろうか」

一群の山犬の呻り声のような無気味な声を上げて、山法師達は、じりじりつと蓮長をとり巻いていた。すすきの穂にとりかこまれた石地藏のように、蓮長の周囲には山法師の長刀がきらめいていた。

「これは幸い、もつともつと蓮長の近くによられたがよい。よく御覽ぜよ、この矢文の紙はな

あ、叡山独特の山法師が、谷川で手すきの紙じや、園城寺の僧徒が叡山の手すきの紙を用いて矢文をするかしないか、ようく考えてことを運ぶがよい。その仔細は、先程の下人が知ってる筈、あの下人を糺明してみるがよい」

「居ない、居ない」

山法師達は、あわてて四辺を探がし始めた。

山道の遙か下の方に、下人の嘲い声か、山彦か、

「うわっ……はっはっ」

と聞えていた。それとも夜鴉であろうか……。